巻頭言

情報過多の時代と「タイパ志向」という流儀

灰野岳晴 Takeharu Haino
広島大学大学院先進理工系科学研究科・WPI-SKCM^2　教授

昨今，巷では次世代を担う若者たちをＺ世代と称し，新しい価値観を解説している。しかし，我々が真に目を向けるべきは，彼らを取り巻く情報環境の変化である。2025年の世界のデータ量は予測値175 ZB[1]を凌いで想像を絶する規模にまで達しており，すべての情報を吟味し選択することはもはや不可能である。この選びきれない時代において，若者たちはSNSなどを通じて他人の体験を事前に確認し，わざわざ自分が時間を割く価値があるかを慎重に問う。彼らにとってタイパ（時間対効果）を上げることは，単なる時短テクニックではない。人生の限られた時間と集中力を守り，情報の洪水の中から納得できる答えを選び取るための，言うなれば切実な生きる知恵なのである。

このタイパ志向は，地道で時間のかかる挑戦と決して矛盾しない。例えば，競争の世界に身を置くプロスポーツ選手は，時間の使い方には厳密である。彼らは闇雲に時間を浪費することはなく，より短時間で効果が表れるようにトレーニングのフィードバックの質を高め，得られた余剰時間をさらなる技術の向上に使用するということを積み重ねているように見える。一流の舞台での長期間にわたる挑戦を，タイパの追求が支えていると言えるのではないか。

同じことは，我々が重視する長期的な視野に立った研究にも当てはまる。学術研究や技術開発の本質は，数多くの試行錯誤と回り道の中にある。必要な探索まで省いてしまえば発見のチャンスは逃げていく。そこで，AIなどの新しいツールを使って作業を効率化し，生じた余剰時間を本質的な試行錯誤に注ぎ込むことは，現代の研究者に不可欠な素養となる。とりわけ博士課程での学びの真価はここにある。博士課程とは単に専門知識を蓄積する場ではない。複雑な課題を見いだし，それに自ら仮説を立て，検証と修正を繰り返すことで解決に至るコストを自力で最小化する術を身に付ける場である。この能力の獲得は，どの分野においても生涯にわたる生産性を飛躍的に高める最高の先行投資となる。

情報過多の時代，タイパ志向の本質は単なる時短ではなく，貴重なリソースを何に投じるかを再設計することにほかならない。研究者である我々が真に時間を投資すべき先は，問題解決や新たな発見につながる本質的な試行錯誤である。筆者のようなかつて新人類と呼ばれた世代も，タイパ志向の流儀を研究活動に組み込むことを真剣に考える時期にきているのかもしれない。そして，より豊かな化学と産業の未来のために，タイパの向上に長けているＺ世代の研究者たちが優れた研究成果を挙げることを期待している。

1）D. Reinsel, J. Grantz, J. Rydning, *The Digitization of the World, from Edge to Core. An IDC White Paper-#US44413318*, **2018**, Sponsored by Seagate.

© 2026 The Chemical Society of Japan